「傭兵メイドのMIP」番外編
傭兵メイドの結婚式
novel:Akuta Kashima
鹿嶋アクタ
illust:Akimitsu Hino
ヒノアキミツ
© 心交社

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

恵と晃平が退院してから最初の週末、療養を兼ねて軽井沢の別荘で過ごすことになった。晃平の怪我した左手はギプスが外れ、もう自由に動かせる。さすがに重いものを持ったりすることはできないが、恵がいるので問題なかった。

市街地を外れ森の中へ入ると真夏だというのに嘘のように過ごしやすい。川に足を浸したり、クワガタムシを探したり、子どもたちと一緒になって楽しんだ。

木立を抜けた場所に広い草原を見つけ、我先にと晃平がごろりと横になる。草原の向こう側には舗装された道があり、サイクリングをする人の姿が見えた。

恵が抱っこしていた華凛を地面に下ろすと、よちよちと歩き出す。最近お兄さんらしくなった晃輝が、そのあとを心配そうについて回った。

「疲れたか？」

仰向けに寝そべった晃平の顔を覗き込む。眩しそうに目を細め晃平は笑っ

た。

「もう歳だなって実感していたところだよ」

「心配するな、あんたはまだ充分若い。昨夜だって俺はついていくのがやっとだった」

恵のことばに晃平が顔を赤く染めた。真昼間からなんてことを言うのだと、咎める目つきだ。

「いいところだな」

抜けるような青い空と緑の連なる景色は切り取ったらそのまま絵葉書になりそうだ。ここへまた一緒にこようと恵は晃輝と約束した。

（約束を守れてよかった）

草原を自由に動き回る子どもたちを眺めながら、恵は晃平の右手を握る。

「晃平……」

相手の名前を呼んだ瞬間、繋がれた指を強く引かれた。抗うことなく相手の胸に倒れこむ。

「おい！」
いきなり危ない、と言いかけたことばを唇ごと攫われる。蜜色の瞳が近すぎて滲んで見えた。相手が笑っているのがキスを通してわかってしまう。つられるようにして恵も笑った。
「キスして欲しいならちゃんと言ってくれ。危ないぞ」
「君の反射速度が鈍っていないか調べたんだ」
嗜める恵に対し、晃平が真面目くさった顔で言い返す。恵はわざと呆れた表情を作ってみせた。
「そんなことしたって、俺はあんたのまえだと無防備になるから意味がない」
「……ッ」
「爪も牙も全部あんたに抜かれたんだ。責任取ってくれ」
心臓に耳を押し当てながら呟いたせいで、己の声はくぐもって聞こえた。ちゃんと晃平に聞こえただろうか。返事がないことを訝しみ恵はそっと相手

を窺った。耳から喉のあたりまで真っ赤になっている相手が見えて、ちゃんと伝わったことに安堵する。

晃平の指が恵の髪をそっと撫で、うなじをくすぐる。ぶるっとおののく恵に気をよくしたのか指は背中から腰へと伸ばされた。不埒な手が尻を撫で回し、肉感を確かめるようにぎゅうっと握りしめる。

身を起こし恵は晃平の耳朶を噛んだ。相手の息遣いがすこしだけ乱れる。腰をもじつかせる恵に気づき、晃平が膝を押し上げた。

生い茂った草花がふたりの姿を覆い隠すのをいいことにしばしのあいだ戯れる。

「は……」

あえかな声がこぼれ落ちる。これ以上はまずいと思いながら、熱はどんどん上がっていった。駄目だ、止められない。服の上から乳首を摘まれ、恵は背筋をおののかせた。

「っ、これ以上は……」

「ん……もうちょっとだけ、だから」
思わずのけ反った喉元に唇を押し付けられる。晃平の服が皺になるのも構わず恵はきつく握りしめた。
「めぐしゃー、おとうさーん」
晃輝の叫ぶ声に、ふたりでびくっと反応する。顔を見合わせて反省し、ほとんど同時に身体を起こした。
「晃輝、どうしたの？」
晃平が声をかけると、晃輝が一目散にこちらへ駆けてくる。兄を追いかけようとして華凛がこてんと転がった。
「華凛！」
慌てて恵は立ち上がり、華凛のもとへ向かった。幸い草がクッションになって痛みは感じていないようだ。華凛は泣きもせずきょとんと恵を見つめている。
抱っこして晃平たちのもとへ戻ると、ふたりの膝の上に沢山の花が積んで

あった。晃輝が摘み取ったものだろう。
シロツメクサに、たんぽぽ、アザミと色も種類も豊富だ。
「かりちゃんにあげるねー」
晃輝が妹の髪にシロツメクサを挿してやる。なんとも微笑ましいふたりの様子につい頬が緩んだ。なんて可愛い兄妹だろう。
（ああ、いいさ認めよう。このふたりは世界一可愛い）
華凛が嫌がって頭を振ったため、次に晃輝はターゲットを恵に定めた。ありったけのシロツメクサとアザミを頭に載せられる。自分からは見えないが、きっと花冠のようだろう。
「晃輝、お花をたくさんありがとう」
「どういたしまして！」
モンシロチョウが視界を過ぎり、晃輝の注意がそちらへ逸れる。華凛とふたりでふたたび駆けていくちいさな背を恵は笑って見送った。
「あんなに走って……また転ぶぞ」

ひやひやしながら眺めていると、ふいに左手の薬指に違和感を覚えた。視線を手元へ向ける。風に揺れる草か虫か何かかと思いきや、晃平がいたずらをしているところだった。

「子どもと一緒になって、あんたまで何やってるんだ」

「ふふふ、できたー！」

晃平が恵の手を掴んで持ち上げる。指と指を交差する所謂恋人繋ぎをしてから、晃平は言った。

「見てよ恵さん、婚約指輪だよ」

恵は両目をぱちくりさせた。彼の言うとおり薬指にはシロツメクサでできた指輪が嵌められている。下からすくうように、晃平が恵の唇にキスをした。

「君を我が伴侶とし、今この瞬間より、生涯ともにあることを誓います。幸せな時も辛い時も、富める時も貧しき時も、健やかな時も病める時も、死が僕らを分かつその時まで君を愛し、慈しむと誓います」

光あふれる草原にさあっと一陣の風が吹く。自分を見つめる蜜色の瞳に吸

い込まれるように恵もまた晃平に口付けた。
それは神聖な誓いのことばだった。
晃平が告げたのと一言一句同じことばを恵もまた告げる。そして最後にすこしだけことばを付け足した。
「あんたと、あんたの子どもたちを生涯愛し続けることをここに誓う」
笑顔のまま晃平は瞳を潤ませた。
晃輝が華凛と手を繋ぎこちらへ向かって歩いてくる。こちらの様子に気づいた晃輝があっと明るい声をあげた。
「おとしゃんとめぐしゃ、ちゅーしてる！」
晃平を見ると、彼も笑顔でこちらを見た。つられて笑いながらふたりで同時に立ち上がる。繋いだ手を離すことなく、晃平とともに子どもたちのもとへ駆け寄った。
まず晃平が華凛を抱き、恵が華凛を抱き上げてそれぞれの頬にキスをする。次に晃平が晃輝に、恵が華凛にキス、最後にもう一度恵と晃平は口づけた。

きゃあきゃあ、と子どもたちの口から歓声があがる。
自分は世界一幸せな花嫁だと、恵は思わずにはいられなかった。